令和５年　第３回　臨時教育委員会　会議録

| | |
|---|---|
| 日　　時 | 令和５年７月３１日（月）<br>１２時３０分～１６時４０分 |
| 場　　所 | 阪南市役所　別棟2階　第3・4会議室 |
| 出席者 | 〈教育委員会〉<br><br>教　育　長　　橋本眞一<br>教育長職務代理者　　八田三紀<br>委　員　　辻　雅之<br>委　員　　水島浩子<br>委　員　　柴﨑一也<br><br>〈阪南市立義務教育諸学校教科用図書選定委員会〉<br><br>教科用図書選定委員長　　四至本美保<br>教科用図書選定副委員長代理　中野泰宏<br><br>〈事務局（生涯学習部）職員〉<br><br>生涯学習部長　　伊瀬　徹<br>生涯学習部副理事　　丹野　恒<br>学校教育課長代理　　鈴木恒一 |
| 書記 | 学校教育課長代理　　鈴木恒一 |
| 傍聴者 | １０名 |

会議の要旨

（教育長）

令和５年　第３回臨時教育委員会を開会する。

署名委員に水島委員を指名する。

**◆議決事項第１号「令和６年度使用阪南市立義務教育諸学校教科用図書の採択について」（学校教育課）**

（教育長）

令和６年度使用阪南市立義務教育諸学校教科用図書の採択について、生涯学習部長からの説明を求める。

（伊瀬生涯学習部長）

議決事項第１号　令和６年度使用阪南市立義務教育諸学校教科用図書の採択について、説明する。

まず、中学校の令和６年度使用教科用図書については、令和５年３月３１日付、文科省通知『令和６年度使用教科書の採択事務処理について』より、「令和４年度に採択したものと同一の教科書を採択しなければならないこと」とあり、現在中学校で使用している教科用図書をご採択いただくことになるため、後ほど採択を求める。

続いて、小学校の令和６年度使用教科用図書の採択については、調査、研究を行った選定委員会より報告を行う。

（教育長）

選定委員会からの報告を求める。

（選定委員長）

阪南市教育委員会より阪南市立義務教育諸学校教科用図書選定委員会選定委員として、委嘱を受け、４回の会議を経て、調査研究を行った。

第１回は、令和５年５月１５日（月）に開催し、選定の方法、期間、観点、守秘義務等について確認した。また、同日調査員に採択及び、調査等について説明し、調査を開始した。

第２回と第３回は、令和５年７月３日（月）と４日（火）に開催し、各種目の調査員から、調査研究の報告を受けた。

第４回は、令和５年７月１２日（水）に開催し、各調査員からの調査研究報告と各学校からの調査研究報告も考慮したうえで、本市の子どもたちにとってどの教科書が望ましいのかということを中心に据えて話し合いを進めた。そして、令和６年度小学校使用教科用図書全種目において、本日推薦する教科書発行者について最終確認を行った。

次に、調査研究及び検討する際の項目を述べる。調査研究については、資料にある通り、「目標・内容の取扱い」「人権の取扱い」「発達段階への考慮」「組織・配列」「学び方の工夫」「補充的な学習・発展的な学習」「その他項目に該当しないもの」

の７つの観点で行った。

また、令和５年３月３１日付、文科省通知『令和６年度使用教科書の採択事務処理について』の「２．採択に当たっての留意事項について」のうち、「（３）採択する際の検討の在り方について」に記載の２点についても留意した。

１点目は、「学習者用デジタル教科書の考慮について」である。

通知には、「教科書採択は紙の教科書を決定する行為であり、調査・検討の対象は紙の教科書であることが基本であること」とある。

「一方で、令和６年度以降、英語のデジタル教科書を紙の教科書と併せて提供する予定であり、令和５年度の小学校英語の教科書採択については、小学校英語のデジタル教科書を調査し、考慮の一事項とすることができること」とされている。

これを受け、外国語に関してはデジタル教科書についても、見本が提供されているため、調査研究の対象とし、採択に向けた検討材料の一つとしている。

ただ、「調査・検討の対象は紙の教科書であることが基本」との通知に基づき、各教科書の２次元コードについては、その配置や数、内容の種類などは一定調査したものの、デジタルコンテンツの内容の充実度合いについては、調査研究の対象とはしていない。あくまで教科書の内容をみて判断するというスタンスで選定委員会も協議を行った。

続いて２点目は「ユニバーサルデザインに関する配慮」である。

通知には「障害その他の特性の有無にかかわらず児童生徒にとって読みやすいものであることが重要であることから、各教科書発行者において、教科書のユニバーサルデザイン化に向けた取組が進められているところである。各採択権者においても、教科書の採択に係る調査研究に当たっては、教科書が障害その他の特性の有無にかかわらず児童生徒にとって読みやすいものになっているかどうかについても比較検討することが望ましいこと」とあることから、調査研究の際には留意している。

この２点も踏まえ、調査研究したものを、この後、国語から順に１種目ずつご報告する。報告後、質問等を受けたのち、１種目ごとに採択を求める。

なお、報告にあたっては、説明の順は、教科書発行者番号の若い順番に説明を行い、教科書発行者名は、「略称」を使用する。

(教育長)

それでは、小学校教科用図書の採択について、選定委員会から報告を求める。

(選定委員長)

国語から報告を行う。東書、教出、光村の３者について報告する。

東書は、「言葉に関する単元が充実しており、『言葉相談室』では接続詞や主語と述語など児童がつまずきやすいところを取り上げていてよい」、「1 年上のつまる音やのばす音のところでは、手拍子のイラストがあり、手の動きと合わせて覚えやすくなっている」などの推薦点があった。一方で、「高学年では平和に関する教材がない」、「文字の量が多すぎて読みにくいところがある」などの課題点があった。

続いて教出は、各学年の目次では、「各単元とＳＤＧｓとの関連を示しており良い」、

「１年生の入門期において、書く姿勢の写真や５０音の口の形の写真、色分けで示している点、助詞が色分けされている点など、わかりやすいよう工夫がされている」などの推薦点があった。また、課題点としては、「平和教材の扱いが少なく感じられる」、「高学年は分冊となっているが、１冊の方が見通しを立てて指導しやすい」などがあがっていた。

最後に光村は、現在小学校で使っている教科書である。

言葉の力を高める活動が充実しており、「各学年の巻末の『ことばのたからばこ』に学年に応じた言葉が掲載されており語彙力の向上につなげられる」、「各学年に平和に関する教材があり平和教育と連携して学習できる」などが推薦点である。一方で、５年に載っている「言葉の意味がわかること」という教材は、現行の教科書にもあるものだが、５年生では難しいと感じる。６年生でもいいのではないかとの意見があった。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

ただいまの説明を受けて、質問・意見等ないか。

(教育長職務代理者)

３者それぞれの特徴はよくわかったが、選定委員会としての推薦順はどうか。またその差はあるのか。

(選定委員長)

推薦順として光村、教出、東書の順番である。光村と他２者の間に開きがある。

(教育長職務代理者)

どのような差があるのか。もう少し詳しく説明を願う。

(選定委員長)

掲載されている教材が大きな理由である。まず、平和に関する教材の取扱いについて説明する。

光村は平和に関する教材が多く掲載されている。３年生から６年生まで各学年にひとつずつある。

教出は４年生上１１０ページの「一つの花」、６年生上７０ページの「川とノリオ」の二つである。

東書は４年生上１３６ページの「一つの花」、４年生下１１２ページの「世界一美しいぼくの村」の二つで、６年生には巻末に「ヒロシマのうた」が紹介されているが、デジタルコンテンツで読む形となっている。

阪南市では、全校で平和学習を行っているので、国語の教材と関連付けて平和学習に取り組めるため、平和に関する教材が豊富であることは大切なポイントと考えている。

また、教材の配列については、「スイミー」という教材が３者ともに掲載されてお

り、東書、教出は、１年生に掲載されているが、光村だけは２年生に配列されている。「スイミー」という作品は、比喩表現が多く、２年生で学習する方が発達段階にあっているのではないかと考えた。

そのほか、「おおきなかぶ」という教材も３者とも１年生の上で掲載されているが、光村だけが訳者がちがい、かぶを引っ張るシーンで表現が大きく違う。東書、教出はかぶの大きさに注目しているように感じる一方で、光村はみんなで力を合わせて引っ張っていることがよく分かる表現となっていると感じられてよい、という意見もあった。

(水島委員)

子どもたちの語彙力をどのようにつけていくのかというのは、大切なポイントと考えているが３者はどう取り扱っているのか。

(選定委員長)

３者とも「言葉」を学んでいくことを重視しており、漢字や言葉に関わる教材は各者工夫されて取り扱われている。

光村では、さきほど推薦点であげたように、各学年の巻末の「ことばのたからばこ」に学年に応じた言葉が掲載されており充実している。気持ちを表す言葉についてもまとめられており、現行の教科書でもよく活用している、他教科でも活用できると、調査員からの報告でも挙げられていた。

教出では、「言葉の広場」「漢字の広場」として、数多く丁寧に取り扱われている。また、巻末には「大事な言い方」を取り上げており、「理由を表すときに使う言い方」などが紹介されている。発言や話し合いをする際に参考にできると考えた。

東書では、言葉や文法的な学習は適切にちりばめられているうえに、推薦点でもあげたように「言葉相談室」というコーナーで、子どもたちがつまずきやすいところをカバーしてくれているのが良い点と言える。

(教育長)

選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は光村で、次に教出である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

(水島委員)

光村を一番に推薦する理由を、もう一度まとめて教えてほしい。

(選定委員長)

語彙力や表現力については、３者とも力を入れていると感じるが、光村の「こと

ばのたからばこ」は、他教科での表現活動にも活用できる良いものである。

また、光村は平和に関する教材も３年生からの各学年にあり、充実している。

さらに、光村だけが２年生になっている「スイミー」の配列については、児童の言語的な成長に配慮されたものになっていると考える。

他にも、推敲（文を見直す）活動が２年生から５年生まで学習するようになっていて、スモールステップになっている点や、１年生上の１１２ページ「うみのかくれんぼ」は、阪南市で取り組んでいる海洋教育に関わる内容である点なども加えて、教材の内容や配列の充実が大きな決め手になった。

(教育長)

学校現場の先生方も、現行の教科書である光村の評価が高いのか。どの点を評価しているのか。

(選定委員長)

学校調査でも、７～８割の学校が光村を一番高く評価していた。

学校調査の意見では、「挿絵の色合いが優しく、見やすい」「子どもたちが考えたくなるような説明文の題材を取り扱っている」「巻頭に『国語の学びを見わたそう』のページがあり、学習の進め方や、前学年で学んだこと、当学年で学ぶことがわかりやすく整理されている」「５年生の『大造じいさんとガン』では、前書きがあってよい」など、様々な観点から評価されていた。

(教育長)

それでは、国語について採択する。採択する教科書は、光村でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、国語の教科書は光村とする。

続いて、書写について報告を求める。

(選定副委員長代理)

書写については、東書、教出、光村の３者について、報告する。

まず、東書は、「各ページに文字を整えて書くための大事なポイントが『書写のかぎ』としてわかりやすく示されている」、「５年生８ページに毛筆の点画の書き方がわかりやすく示されており、筆の面を顔に見立て、始筆・送筆・終筆を『とん』『すう』『ぴたっ』と擬音を使って説明されておりわかりやすい」という推薦点がある。ただ、様々なところにイラストが使われているが、意図がわかりにくいものや表現と合っていないものがあるという課題点もある。

続いて教出は、「『めあて』『ふりかえり』が明確に言葉で示されており、子どもにもわかりやすい」、「穂先の通り道がわかりやすく示されている」などの推薦点がある。一方で、発展的な内容や他教科との関連について扱っている「レッツトライ」

のコーナーは、内容は良いが巻末などにまとめていた方がつかいやすいという指摘もあった。

最後に光村は、「観察日記や調べ学習に活かせるようなポイントが紹介された『書写広げたい』が有効である」、「１年生のひらがななどで筆順を意識できるよう色分けされていてよい」という推薦点がある。ただ、「猫のイラストを多く使用しているが、低学年の教科書でも多く、子どもが気が散ってしまう懸念がある」、「１年生の１１ページに『いろいろなせんをかこう』という教材があるが、イラストと運筆の向きがあっていないように感じる」という意見もあった。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

ただいまの説明を受けて、質問・意見等ないか。

(辻委員)

毛筆の始筆・終筆や筆の運びについてはどうか。また、文字のバランスについてわかりやすいのは、どの発行者のものか。

(選定副委員長代理)

まず、毛筆の筆の運びについては、毛筆が始まる３年生の教科書をぱらぱらとみるとわかるが、東書と光村は「穂先の向き」を顔で表して、子どもたちがイメージしやすくしている。また、各者とも擬音を使って筆圧や筆の動かし方を表現している。それぞれの工夫があり、どれも子どもたちにはわかりやすいように感じた。

また、５年生の教科書を見てほしい。

東書は８ページに様々な点画の筆の運び方が改めて載っており、いつでも振り返れるようになっている。また、顔や擬音を用いており、わかりやすい。これは４年生以上の各学年に同じように詳しく載っている。

教出は５ページに点画の種類について記載がある。４年生では見開き１ページで大きく扱われているが、５，６年生では１ページにまとめられており、少し窮屈な印象である。

光村は４年生では見開き１ページで大きく扱われているが、５，６年生では扱われていなかった。

次に、文字のバランスについて説明する。

５年生の教科書で説明する。東書は１０ページ、教出は１２ページ、光村は６ページである。

「道」という字は子どもたちにとって文字のバランスをとるのが難しい漢字である。東書と教出は「しんにょう」の部分とつくりの部分を色分けし、その配置やバランスがわかりやすいような工夫がある。一方光村は、字形の整ったものと少しアンバランスなものを並べて示し、違いに気づかせる工夫がある。それぞれ工夫はあるが、教出が最も丁寧でわかりやすいように感じる。

また、「しんにょう」は筆使いも難しい部首で、３者とも記載はあるものの、東書と教出には筆を止め、方向を変える「点」が書かれているが、光村には見当たらない。

また、教出は筆圧にも触れながら丁寧に説明されている。ただ、３者とも２次元コードがあり、具体的な筆の運びは動画で確認できるようになっていた。

(辻委員)

書写の目標は「各教科の学習活動や日常生活に生かす書写の能力の育成」との話であったが、光村の６年生の「書写ブック」は良いように感じるがどうか。

(選定副委員長代理)

光村の６年生２２ページから「書写ブック」があり、各学年の他教科との関連を取り扱う「書写広げたい」というコーナーの総まとめとなっており、これまでの書写の学習を日常生活に生かしていくためのよいツールである。また、とじ込まれているが、外して別冊にすることも意識した構成だと感じる。

東書には「学びを活かそう」「生活に広げよう」で取り上げており、教出では「レッツトライ」で取り上げられている。両者とも光村の「書写ブック」のようにまとめたものはなかった。

(水島委員)

硬筆・毛筆の指導にあたり、重要なポイントは何か。

(選定副委員長代理)

書写の学習は、「各教科の学習活動や日常生活に生かす書写の能力の育成」を目標としており、低学年での「姿勢」「筆記具の持ち方」「点画や一文字の書き方」「筆順」などの内容から始まり、「文字の組み立て方や大きさ」などに注意しながら、まとまった文字を書く内容へとつながっていく。

そのため書く内容や文字によって、重視するポイントは違ってくるが、まずはどの学年でも「姿勢」や「持ち方」については、常に子どもたちに声かけをしながら指導する。

各者とも教科書の始めのあたりに姿勢や持ち方、用具の扱い方について掲載されている。各者５年生の教科書をみてほしい。東書は６ページ、教出も６ページ、光村は４ページである。３者を見比べると、教出がうまくまとめられていてわかりやすいという意見があった。

また、子どもたちには難しい小筆の持ち方についても丁寧に説明されている。

(柴﨑委員)

選定委員会としての推薦順はどうか。３者には差があるか。

(選定副委員長代理)

推薦順は教出、東書、光村の順である。教出、東書はほとんど差がなく、２者と光村には少し差がある。

(柴﨑委員)

その差の理由を簡単に教えてほしい。

(選定副委員長代理)

まず書写の学習の際に、子どもたちが何を学び、何を身に付けるのか、わかりやすくめあてが示されていることが大切で、その点では東書と教出が良い。

また、それぞれに工夫されているが、子どもたちにとってのわかりやすさや見や

すさで比較したときに、教出の方が良い点が多く、課題点が少ないと判断した。
(教育長)
確認するが、選定委員会として推薦する発行者はどこか。
(選定副委員長代理)
選定委員会としましては、最も推薦する発行者は教出である。
(教育長)
今の報告について、意見・質問はあるか。
それでは、書写について採択する。採択する教科書は、教出でよいか。
(全委員)
異議なし。
(教育長)
異議なしと認め、書写の教科書は教出とする。
続いて、社会について報告を求める。
(選定委員長)
社会は、東書、教出、日文の３者について、報告する。
まず東書は、学習の進め方が基本的に「つかむ」「調べる」「まとめる」「いかす」の流れになっていて、「まとめる」の部分では学習問題やその単元の言葉を確認しながら、振り返りをすることができる、また、「まとめる」活動では様々なまとめ方を例示しており、ＩＣＴ活用を含めた技能が身に付くようにしているなどの推薦点がある。課題点としては、「様々なフォントが使われていて、読みにくい」、「図と文字が重なっているところもある」、「４年生の単元配列が『水の処理』『ごみの処理』となっていて、阪南市の副読本やこれまでの流れと反対となっているため使いにくいのではないか」という意見があった。
次に教出は、社「会科で使う見方・考え方がわかりやすく示されており、重要な観点が太字で示されている」、「子どもたちの思考のヒントとなる『対話モデル』が本文中にほとんど入っておらず、読み取りの答えにならないよう直接的な表現が極力減らされている」などの推薦点がある。一方で、その「対話モデル」が本文中にないことにより、子どもたちが読み取ったことを確認する必要があり、指導者の技量が問われると考えられる点や、巻末資料がやや少なく感じるなどの課題点もあがっている。
最後に日文だが、現在小学校で使っている教科書である。
各単元の始めに「学習問題」が示されており、どこに焦点を当てて学習していくのかがわかりやすい。また、見開きで「課題発見」「考えを深める」「問題解決」の流れが１時間で構成されており子どもたちが主体的に取り組みやすい点は良いが、「対話モデル」が本文中にあり、課題の答えやまとめになってしまっており、課題

追究場面には向かないのではないかとの意見があった。その他、各ページ下に「身につけたい力」がインデックス的に書かれており、どんなことを意識して学習を進めるのかを考えやすいが、表現が指導者向けに感じられ、学年によっては、難しく感じられるとの指摘もある。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

まず、私から質問する。小学校の社会科において、子どもたちに最も育みたい力、一番に身につけさせたい力とは、どのような力か。

(選定委員長)

小学校学習指導要領における、社会科の目標は「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追及したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成すること」と示されている。

また、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱に沿った資質・能力に関わる具体的な目標も示されている。

つけたい力は多様に示されているが、その力をつけるためのポイントは２点に整理されている。まず「社会的な見方・考え方」を働かせることである。そして、「課題を追及したり解決したりする活動を通して育成する」ということである。社会科の学習活動においては、この２点をどう組み込むかということが大切と考える。

(教育長)

では、そのような学習活動を実施するにあたり、まずは「社会的な見方・考え方を働かせるということ」に関して最も適していると考えられる教科書は、どの教科書なのか。

(選定委員長)

「社会的な見方・考え方」について、各者がどのように扱っているか説明する。

東書の５年生上の２ページの「この教科書のつくりをみてみよう」にあるように、ドラえもんのキャラクターが見方・考え方を示している。各ページをぱらぱらとみると、色々なところに配置されているのがわかると思う。これが課題解決のヒントとなるが、ドラえもんのマークだけでは、どの見方・考え方を使っているのかがわかりにくいと感じる。

次に教出の５年生の５ページを見てほしい。「社会科で使う見方・考え方」がまとめて示されている。そのあとのページをぱらぱらとみると、子どもの吹き出しのイラストの中で、太字になっているものがあると思う。「比べる」や「どのあたり」「時期」などが見方・考え方を表している。吹き出しの内容が考えるヒントになっているだけでなく、どの見方・考え方を働かせているのかがわかりやすい。

日文の教科書では、５年生７ページを見てほしい。ここでは、「空間」「時間」「関係」の「三つの目のつけどころ」についてアドバイスしているとある。実際に見ていただくと、２６ページは「空間」、４３ページは「関係」となっており、どの見方・考え方かは一定わかりやすくなっている。ただ、３年生の教科書でも同じように三つの言葉で分類されており、３年生の児童にとってはわかりにくいように感じる。

見方・考え方の視点で考えると、多様な見方・考え方を示しており、どの見方・考え方を働かせているのかがわかりやすい、教出が最も適していると考える。

(教育長)

では、「課題を追及したり解決したりする活動」に関して、最も適していると考えられる教科書は、どの教科書なのか。

(選定委員長)

まず、東書は５年生上２４ページに「学習の進め方」が掲載されている。「つかむ」「しらべる」「まとめる」「いかす」の流れが示されており、課題解決場面である「調べる」の取り組み方が示されているほか、各ページ下部に記載の「まなびのポイント」を活用して考えることが書かれている。ただ、子どもの対話モデルの中で、資料の読み取りの答えやまとめになっているものもあり、課題追及には向かないと感じるところもあった。

次に教出では５年生６ページに「社会科の学習の進め方」があり、「つかむ」「調べる」「まとめる」「つなげる」の流れが示されている。学習問題の解決場面である「調べる」では、キーワードが示され、解決のヒントとなるほか、「自分で調べて考える」を設けており、課題解決の学習モデルとして有効であると感じる。

続いて日文の５年生２ページには「社会科の学習の進め方」が示されている。問題の追及は一本道ではないことやくり返し問題を追及していくことがわかる図となっているが、追及の方法はあまり具体的に示されていないように感じる。単元の中では、ページ下に「問題を追及・解決する力を身につけよう」と書かれているページで課題解決をするが、ややわかりにくく感じる。また、解決のヒントは「学び方・調べ方コーナー」で示されているが、それほど多くはない。

「課題を追及したり解決したりする活動」で考えると、各者に特徴があると思いうが、子どもの課題解決の活動には教出が最も適していると考える。

(教育長職務代理者)

３者それぞれの特徴はよくわかったが、採択に向けて、選定委員会としての推薦順はどうか。

(選定委員長)

選定委員会としては、教出、日文、東書の順番で推薦する。

(水島委員)

推薦順はわかったが、社会の教科書、特に５・６年生は大きくて重い。東書の５・６年生は分冊になっており、軽量化されているのは良い工夫と感じたが、これを評価する意見はなかったのか。

(選定委員長)

調査員調査や選定委員会では、分冊に関する意見はなかったが、学校調査では、８校中６校で分冊についての意見があった。うち４校は持ち運びや置き場所の視点からの肯定的な意見だったが、残り２校は不便である、分冊の必要はないという否定的な意見であった。

(教育長職務代理者)

教出を推薦する理由をもう少し教えてほしい。

(選定委員長)

調査研究にあたって注目したのは学習問題設定へのプロセスが子どもの立場になっているかどうかという点である。５年生の「米づくりのさかんな地域」のところを例に出して説明する。

東書は５年生上の７６ページ、教出は５年生６８ページ、日文は５年生７６ページである。学習のスタートはどの教科書も始めに問いかけがあり、そこから調べたり、話し合ったりしながら「学習問題」を作っていくという流れである。どの教科書も次のページに「学習問題」があるが、ほとんど同じになっている。ただ、そこまでの記述に違いがある。

東書では本文での説明に加え、本文中に子どもたちの対話モデルがあり、最後は「調べることにしました」となっている。どの単元もだいたいこの流れである。子どもが自分たちで学習問題を作るというよりも、同じ流れで進められているように感じる。

また、日文は子どもたちの対話モデルが中心に本文が構成されているが、資料の読み取りの結果が示されているものもあり、子どもたちが読み取らなくてもわかるようになっている。７９ページには話し合っている様子のイラストがあり、学習問題づくりに結びつく活動を示しているが、〇〇を調べればいい、関わりがあるのではないか、など、やや誘導的な表現であるように感じる。

一方、教出は本文での説明が少なく、対話モデルは本文中にない。また吹き出しの中も資料の読み取りや考えるためのヒントになっているが、直接的な表現は避けられている。６９ページの吹きだしでも疑問の提示でとどめられており、子どもたち自身の疑問をもとに学習問題を話し合って作っていくことができそうに感じる。

社会科の学習において、学習問題をどう設定するかは、「主体的で対話的で、深い

学び」に直結する重要な点であると考えることから、教出を最も推薦する教科書とした。

(教育長)

では、改めて選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は教出である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、社会について採択する。採択する教科書は、教出でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、社会の教科書は教出とする。

続いて、地図について報告を求める。

(選定副委員長代理)

地図は、東書、帝国の２者について報告する。

まず東書は、「９ページからの地図の決まりが細かく記載されており使いやすい」、「７７ページの歴史や７５ページのグラフなど高学年向けの詳しい資料がある」などの推薦点がある。ただ、「逆に高学年向けの資料が多い」、「１ページあたりの情報量が多い」という課題点もある。

次に帝国は、現在小学校で使っている教科書である。

「１１ページから地図の使い方が複数ページで取り扱っておりわかりやすい」、「地図が大きくてシンプルで見やすい」、「ふりがなやインデックスなどがあり、３，４年生が活用しやすい工夫がある」という推薦点がある。一方で、外国についての記述は少ないという意見もある。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

ただいまの説明を受けて、質問・意見等はないか。

(教育長職務代理者)

小学生が地図を見る、地図を読むことを学ぶのは、何年生のどの教科においてか。

(選定副委員長代理)

子どもたちが最初に地図に触れるのは、３年生の社会科の学習が多い。また、主に社会科で活用することが多く、３，４年生の地域や大阪府の学習、５年生の気候や地形、産業に関わる学習ではよく活用する。６年生の歴史学習でも地名が登場す

ると調べることがある。

(柴﨑委員)

地図は他の学年や、社会科以外の時間には活用しないのか。

(選定副委員長代理)

社会科の時間で使うことが最も多いが、「どの学年であっても、総合的な学習の時間で調べ学習をするとき」、「国語などの教科で地名などが出てくるとき、外国語の学習と関連して世界の国を調べるとき」などにも活用している。

(教育長)

小学生が、地図を見る、地図を読むときの「楽しさ」、地図を読む「興味・関心」を高められるのはどちらの教科書か。

(選定副委員長代理)

東書では、各ページに「マップでジャンプ」というコーナーが設けられており、子どもたちが自分で地図を調べて、答えたくなるようになっている。また、６２ページには世界の料理、７７ページから８０ページでは日本の歴史と世界とのかかわり、８１ページには日本の伝統文化など、地図から波及する様々な資料を扱っており、子どもたちの興味を高める工夫がある。

帝国には、各ページに「地図マスターへの道」のコーナーが設けられており、子どもたちが自主的に地図で学べるようになっている。また、１２４ページには何問答えたか自分で記録できるようになっており、答えも載っている。ちょっと空いた時間に、地図を自分で開いて楽しめるような仕掛けだと感じる。

また、推薦点でも挙げたが、大きな字で書かれていたり、ルビがふられていたり、と３，４年生の子どもたちにも使いやすいと感じる。３年生から始まる社会科の学習で、子どもたちが地図に興味関心をもつ大きな力になると思う。

これらの点から、地図を読むときの「楽しさ」、地図を読む「興味・関心」を高められるのは帝国の教科書だと考える。

(教育長)

選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定副委員長代理)

選定委員会として、最も推薦する発行者は帝国、続いて東書である。

(教育長)

学校の先生方は、２者で推薦順が拮抗するようなことはなかったのか。

(選定副委員長代理)

学校調査の結果は、ほぼ全ての学校が帝国を一番高く評価している。

学校調査の意見では、「地図記号のもとになったもののイラストがあり、興味をもって見ることができる」「３年生向けと高学年向けの地図がある」「縮尺がわかりやすいものさしがページ下部に記載されていて、実際の距離を感じとりやすい」などの３年生が使用する場面を想定した意見が多くあった。また、共通して多かったのは、「地図の色合いがよく、見やすい」ということを評価したものであった。

(教育長)

選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定副委員長代理)

選定委員会としましては、最も推薦する発行者は帝国である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、地図について採択する。採択する教科書は、帝国でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、地図の教科書は帝国とする。

続いて、算数について報告を求める。

(選定委員長)

算数は、東書、大日本、学図、教出、啓林館、日文の６者について報告する。

まず東書は、「５年生上１５ページの子どもたちの多くがつまずきやすい『倍の考え方』を扱ったところでは詳しく説明されており良い」、「定着を図る問題として、『たしかめよう』『つないでいこう』があり、児童の定着度により、どちらかを選べるような形になっている部分はよい」という推薦点がある。一方で、「ノートづくりに関するページでは、『めあて』の記載がなく、阪南市で取り組んでいるノートづくりとは合わない」、「文字が多く低学年では字が細かすぎる」という課題点がある。

次に大日本は、「『算数の大切な考え方』として、どの学年でも１０ページあたりに見方・考え方をまとめており、低学年では、巻末のシールを貼って、ひらめきアイテムが増えていくという子どもがわくわくするような仕掛けになっているのが良い」、「４年生以上の教科書では数直線図の書き方が、巻末あたりにまとめられており、定着を図る工夫がある」などの推薦点がある。ただ、「５年生の『小数のかけ算』と『小数の割り算』の間に『体積』が配列されており、学習の流れからはよくない」、「イラストの絵が古く感じられる」との意見もある。

次に学図は、「各学年２ページの『算数の学び方』では『めあて』について、丁寧に説明されているのがよい」、「５年上９５ページ『小数のかけ算』などでは２直線

図だけでなく、４マス関係表を扱っており、子どもにもわかりやすい」などの推薦点がある。ただ、各学年９ページに「算数で見つけたい考え方モンスター」を載せており、算数の学びに重要な９つの見方・考え方をキャラクター化することで子どもたちが楽しみながら学習に向かっていくことができると思われるが、種類が多く、情報量が多く感じられるという意見もあった。

次に教出は、「どの学年でも巻頭に『算数のミカタ』があり、様々な学習の際には『つながるミカタ』として見方・考え方を示しているのが良い」、また、「単元末では『４コマ漫画』で楽しく振り返れるようになっている」という推薦点がある。一方で、「『めあて』ではなく『？はてな』で示されており、阪南市のノートづくりとやや合わない」、「５年の『小数のかけ算』『小数の割り算』の間に『合同と三角形、四角形』が入っており、学習の流れとしてはよくない」などの課題点もあがっていた。

次に啓林館は、「各学年２、３カ所で、見方・考え方を深めようというページが設定されているのが良い」、「各単元の『学びのまとめ』では、必ず『ふりかえろう』で単元全体を通して自分が大切に思ったことについてふり返りを書くところが設定されている」、「単元としてのふり返りを設定しているところがよい」という推薦点がある。ただ、「『めあて』の前に『めばえ（芽のマーク）』が示されているが、児童の思考を誘導してしまうのではないかと感じる」、「全体的に字が多く読みにくい」という意見もある。

最後に日文は、現在小学校で使っている教科書である。

「巻末に『学び方ガイド』（２年生以上）があり、片面には、算数の授業の基本的な流れ、裏面には、算数で使いたい見方・考え方が載っている」、「いつでも見返せるように、切り取れるようになっているところもよい」、「６年生２５ページなど各単元の終わりごろにある『わかっているかな』では、全国学力・学習状況調査の結果から、子どもたちがつまずきやすい問題が『まちがいやすい問題』として取り上げられていることも工夫されている」などの推薦点がある。ただ、課題点として、「巻頭の『教科書の使い方』のページがわかりにくい」、「全体的に文字が多い」という指摘もあった。

各者の調査、研究報告については以上である。

（教育長）

ただいまの説明を受けて、質問・意見等ないか。

（柴﨑委員）

上下巻に分かれているもの、いないもので長所・短所はあるか。

（選定委員長）

高学年は、学年で１冊になっている発行者が多い。分かれているのは、５年生の東書と学図である。１冊になっている方が学習の見通しが持ちやすいというメリットもあるものの、５年生は学習内容が多いので１冊になると重いという指摘もあった。また、教出の１年生の教科書が分かれていないのがしんどいという意見があった。

(辻委員)

デジタルコンテンツの使いやすさに差があれば教えてほしい。

(選定委員長)

一人一台端末がある中で、デジタルコンテンツについては、各者掲載がある。

特に図形に関わる学習では、動画があるとイメージしやすくなり、学習の助けとなる。デジタルコンテンツの内容の充実度は調査研究の対象外としているので、２次元コードの配置や掲載数、その内容などで、６年生の「対称な図形」の単元で比較すると、数が一番多かったのは、東書で１４カ所、次いで大日本、日文の１０カ所であった。少ないところは５カ所だったので、やや差があった。東書と大日本、学図はページの下に２次元コードが配置されていて、見つけやすい。他者は動画などがある図形や問題の横に２次元コードがあった。

また、東書はデジタルコンテンツがある図形や問題の横にマークを付け、どのような内容かわかるようにしている。大日本は２次元コードの横に説明をつけている。学図もマークを付けている。デジタルコンテンツの大まかな内容では、東書、学図、啓林館、日文は、動画のほかに自分で図形を動かせるようになっていた。

(水島委員)

６者あるが、上位と考える発行者を教えてほしい。またその差や理由を再度説明願いたい。

(選定委員長)

選定委員会としては、大日本、学図、日文の３者が上位と考えている。他の３者とは開きがある。

大きな理由としては、「阪南市の子どもたちに合っているか」、「阪南市で取り組んでいる算数の学習にマッチしているか」になる。阪南市では課題解決型の学習に取り組んできている。特に「めあて」を子ども自身が意識して学習を進めることは重要と考えており、大日本、学図、日文は、算数の学び方やノートづくりの例、教科書内での記載で「めあて」が強く意識されている。阪南市の取組とマッチしているし、子ども自身も手に取ったときの戸惑いがないと考える。

(辻委員)

大日本、学図、日文の３者それぞれの特徴について、もう少し説明願う。学図６

年生の別冊「中学校へのかけ橋」は数学への移行に良いように思えるが評価はどうであったか。

(選定委員長)

大日本については、ノートの書き方のページに「話し方」と「聞き方」についても触れられており、学年に応じた話し方、聞き方が説明されているのが良い点である。また、子どもたちのつまずきやすい「倍や割合」の学習が、２年生から系統立てて取り上げられているのも良い。ただ、すでに申しあげたとおり、「小数のかけ算」と「小数の割り算」の間に「体積」が配列されており、学習の流れからはよくない点が気になるところである。ちなみに、６年生の最後には、別冊ではないが、「数学の世界へ」というコーナーを設け、中学校への移行を意識させる内容がある。

学図については、「めあて」の説明として、問題を見て考えたい、表したい、知りたい、調べたいなどと、子ども自身が「学びたい」と思ったことがめあてであり、また、学習の始めだけではなく、子どもたちの中のめあてというのはどんどん変わっていくということを示しており、子どもたちが主体的に学ぶことや深く学ぶことが強く意識されているのが良いという意見のほか、おっしゃられた「中学校へのかけ橋」で復習や中学校への発展学習を行うことができ、充実しているという評価があった。ただ、他者と違いAB版であるため、横に大きいため子どもたちの机に置きづらいのではないかという懸念もある。

日文については、学習内容が焦点化されており、学習の流れがわかりやすくなるように、全時間にめあてとまとめが設定されている。さらに、見方・考え方が「めあて」の近くに配置されているのも良い点である。また、巻末に「算数マイトライ」という補充問題が多く載っているページがあり、内容も、しっかりチェック、ぐっとチャレンジ、もっとジャンプというように基本、応用、発展の３段階に分けた設定になっているうえ、探求をテーマにしたページも設定されていて、様々な問題に挑戦できるようになっている点がとても良い点である。また、大きな課題点がなく、現行の教科書よりもさらに使いやすくなっているという評価であった。ちなみに、６年の最後には別冊ではないが、「もうすぐ中学生」があり、中学校での学びにつなげる内容となっている。

(教育長)

では、選定委員会としての推薦順位はどうか。

(選定委員長)

選定委員会としては、日文を一番に推薦する。続いて大日本と学図である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、算数について採択する。採択する教科書は、日文でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、算数の教科書は日文とする。

続いて、理科について報告を求める。

(選定副委員長代理)

理科は、東書、大日本、学図、教出、信教、啓林館の６者があるが、信教につきましては、見本本が届いておらず、調査研究を行っていないので、東書、大日本、学図、教出、啓林館の５者について報告する。

東書は、「『学ぶ前に』と『学んだ後に』で同じ問いについて考える工夫があり、学びの成果を実感できるように考慮されている」、「全学年でプログラミング教育に関する教材がある」などの推薦点がある。ただ、「絵や写真が大きく見やすい反面、文字の大きさが全体的に小さく読みにくい」、「大切なことばが小さく書かれていることもある点や、文字の配置が様々でわかりにくい児童がいるのではないか」との指摘があった。

続いて大日本は、「文章量が少なく、全体的に見やすいレイアウトになっている」、「理科の学習内容を使ったものづくりも多く掲載されており、子どもの意欲を高める」などの推薦点がある。一方で、「６年生の２２ページ『生き物同士のかかわり』と５６ページ『植物の体のつくりとはたらき』が分かれており、評価がしにくいのではないか」、「実験結果がすぐにわかってしまうようなページ割になっているところがあり、その部分では教科書を使って実験を行うのが難しい」との意見もあった。

続いて学図は、「写真資料が見やすく、要点を捉えている」、「例えば５年生４６，４７ページのメダカの卵の孵化と成長の様子の写真はとてもわかりやすい」、「単元のはじめに『できるようになりたい』が３つ示されており、つけたい力がキャラクター化されており親しみやすい」などの推薦点がある。ただ、３年生の「チョウを育てよう」の単元が４番目になっており、阪南市では時期が過ぎてしまうため、単元の入れ替えが必要であることや、「調べる」活動において同じページに「わかったこと」が載っているため、答えがすぐにわかってしまうページがあるなどの課題点がある。

続いて教出は、「単元のはじめに、『学習のつながり』が示されており、既習内容だけでなく、今後学習する単元へのつながりも示されているし、先を見通すことができる」、「実験の際の『安全の手引き』が背表紙に掲載されており、教科書を閉じて実験を行う際にも参照できるように配慮されている」という推薦点がある。

一方で、「字が小さくて読みにくく感じる」、「４年生７８ページの『雨水と地面』という単元が９月ごろの配列になっているが、雨についての単元は梅雨の時期の方が授業をしやすい」との意見もあった。

続いて啓林館は、現在小学校で使っている教科書である。

「どの学年でも多くのイラストや写真がバランスよく見やすく配置されている」、「５年生２ページにある『理科の楽しみ方』において、課題解決型の学習の流れがわかりやすく記載されている」などの推薦点がある。一方、単元末の学習定着のための「たしかめよう」は問題数が少なく感じるという課題点もある。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、ご質問はないか。

(教育長職務代理者)

教科書の大きさに差があるが、意見はあったか。

(選定副委員長代理)

サイズを比べてもらうと、東書と大日本が一番大きく、次に教出が大きく、学図と啓林館が一番小さくなっている。横幅は同じである。

調査員調査でも、学校調査でも、選定委員会でもサイズに関しては、多くの意見があり、概ね大きい方が使いづらく、重くてかさばるというものであった。また、理科ではタブレットで動画を見るような活用する場面もあるため、教科書とタブレットを同時に机に置くことを考えるとコンパクトな方が良いと考える。

(辻委員)

理科ではタブレットを使うとの話だが、デジタルコンテンツについてはどう評価しているか。

(選定副委員長代理)

先ほど算数でも申したように、デジタルコンテンツの内容の充実度は調査研究の対象外としているので、２次元コードの配置や掲載数、その内容などでまとめると、数が一番多いのは大日本である。東書、学図、啓林館がほぼ同数で、教出は少ない。配置は大日本がページ下にあり、他者は様々なところに配置されている。また、東書、大日本、啓林館は、２次元コードの横にどのようなコンテンツに飛ぶか説明がある。中でも大日本が一番詳しく説明されている。デジタルコンテンツの内容は、東書は動画のほかに理科ノートや発展学習など様々で、大日本、学図、啓林館は動画が中心で、一部資料や外部サイトに飛ぶものもあった。教出は動画が少なく、自社のサイトに飛ぶものがほとんどであった。

デジタルコンテンツで考えると、大日本の評価が高く教出はやや評価が低くなる。

(柴﨑委員)

採択に向けて、５者の中には、差はどれくらいあるのか。

(選定副委員長代理)

サイズや配列、写真や実験内容など、各者それぞれの特徴があり、良いと感じる点がある。

東書は写真がダイナミックに配置されており興味を引くと考えられるし、デジタルコンテンツの種類が多く活用しやすいと思える。

大日本は考察の活動では、常に話し合う活動を取り入れていることやデジタルコンテンツが豊富で発展的なものもあることなどが良い点である。

学図は、実際に見たり体験したりすることが難しい事象について、例えば、流れる水で石が削れる様子を生け花用スポンジを使って視覚的に捉えられるような実験を計画している点や写真がクリアで見やすいことが良い。

また、教出は、巻頭に前学年までに学んだことをまとめていたり、単元のはじめには学習のつながりをしめしたり、と既習事項や系統性に力を入れていることがわかる。

ただ、単元の配列や写真、イラストの見やすさ、問題解決の学習がしやすい点、サイズがコンパクトな点など、総合的に考えたときに啓林館が群を抜いて評価が高い。

(教育長)

では、選定委員会としての推薦する発行者はどこか。

(選定副委員長代理)

選定委員会として、最も推薦する発行者は啓林館である。続いて東書、大日本、学図が並んでいるという評価である。

(教育長)

最後に確認したいのだが、学校調査の支持もやはり啓林館が高かったのか。

(選定副委員長代理)

８校中６校で一番高い評価で、残り２校も２番目に高い評価だった。

学校調査では、「写真がたくさん使われており、大きくて見やすい」、「『くらしとリンク』では、日常生活で理科が活かされている場面を知ることができる」「『確かめよう』と『活用しよう』のところに解説動画を見ることができるＱＲコードがあるので、自分で問題に取り組んだ後、学習を振り返るのに役立つ」など、高く評価するコメントがあった。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、理科について採択する。採択する教科書は、啓林館でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、理科の教科書は啓林館とする。

続いて、生活について報告を求める。

(選定委員長)

生活は、東書、大日本、学図、教出、信教、光村、啓林館の７者があるが、信教につきましては、見本本が届いておらず、調査研究を行っていないので、東書、大日本、学図、教出、光村、啓林館の６者について報告する。

まず東書は、「下の巻末の『かつどうべんりてちょう』で伝え方の例を挙げておりわかりやすい」、「挿絵が大きく見やすい」、また、「上巻３２ページの種と芽とつぼみの写真は比較しやすいように工夫されておりよい」という推薦点がある。ただ、「挿絵が多く写真が少なく感じる」、「上巻６０、６１ページでは動物しか取り扱っていないがアレルギーのことがあるので虫もある方が良い」という指摘もあった。

次に大日本は、「下巻１１８ページにある『がくしゅうどうぐばこ』の中で、発表の仕方、まとめかたなど詳しく紹介されている」、他にも「地図の作り方など子どもたちが活動するのに、ヒントになるようなページが豊富にある」、「下巻４８、４９ページにＳＤＧｓと学校での子どもたちの活動との関連が示されておりよい」との推薦点がある。一方で、「巻頭の目次のページが一覧ではなく見にくい」、「導入、活動、ふり返りのつながりがわかりにくい」という意見がある。

次に学図は、「巻頭の目次では月ごとに何をするのかが書かれており、子どもたちにとっても教師にとってもいつどのような学習をするのか見通しを持ちやすい」、「『ものしりノート』の説明がわかりやすく、子どもたちの学習の参考になる」などの推薦点がある。ただ、「その『ものしりノート』でも情報量が多すぎるものがある」、また、「巻末にまとまっている方が使いやすい」、「イラストの統一性がなく、タッチがちがうページがあり見づらい」との課題点もあがっている。

次に教出は、「上巻の３９ページ『もしも、中が見える虫眼鏡があったら』や下巻３７ページ『過去や未来を見ることができるモニターがあったら』のように、子どもが興味を引くような導入がある」、「『こんがらがっち』の『いぐら』が採用されていて、子どもたちに親しみやすい」などの推薦点がある。一方で、「各ページが道でつながっているようなイラストがあり、学習に集中しにくいのではないかという懸念がある」、「阪南市の多くの学校では昔遊びをしているが、昔遊びのことが載っていない」という課題点もある。

次に光村は、「イラストに統一感があり、とても見やすい」、「『ふりかえろう』では、『せいかつの学習でたいせつにしたい１４の力』が記載されているが、子どもたちが振り返りをしやすく、また教員の評価にもつなげやすい」という推薦点がある。一方、「少し大きく重い」、「別冊で『ひろがる生活辞典』がついている」、そのほかにも「春夏秋冬の生き物のカードもついている」、「持ち運びには便利だが、外した後がバラバラになってしまうので、一冊にまとまっている方がよい」という意見もある。

最後に啓林館は、現在小学校で使っている教科書である。

各ページの右下に言葉が書かれており、「これが子どもたちが次の活動に向けてのめやすや気持ちの移り変わりがわかりやすくなる仕掛けになっている」、また、「教師も指導する際の声掛けの参考となり、次の活動への連続性を確認することができる」、「デジタルたんけんブックで記録・ふり返りができる」などの推薦点があるが、デジタルたんけんブックは１年生の始めは使いにくいため、別冊としてあるほうがよいとの意見もあった。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、質問はないか。

(教育長職務代理者)

光村の「こんなこともあるかもね」「こんなのもいいかもよ」は、絵本を読むような感覚で、子どもたちが自分で読み、学べるのではないかと感じた。色々な気持ちや考え方を肯定しており良い学びになると感じた。これについての意見はあったか。

(選定委員長)

絵本作家のヨシタケシンスケさんのイラストで、子どもたちにもとても親しみやすく、素朴なつぶやきで興味付けになると考える。また、学校調査では、様々な価値観で考えたり、学びを考えたりしている児童の姿が、ユニークな文章と絵で表現されているのが良いという評価もあった。

一方、違う学校からは、イラストを見ることが楽しすぎて、学習内容を聞くよりも絵を見ることが好きになる児童が出てくる可能性があるのではないかという懸念や、イラストにも字が入っているので、文字が多くなってしまっているという意見もあった。

(教育長)

６者それぞれの特徴は、さきほど聞かせていただいたが、採択に向けて、差はないのか。

(選定委員長)

推薦順としては、まず啓林館、それから光村、その次に東書と教出である。啓林館と他者では大きな開きがある。

(柴﨑委員)

どうしてそのような順番になるのか、その理由を教えてほしい。

(選定委員長)

まず、啓林館は単元ごとにわくわく（導入)、いきいき（活動)・ぐんぐん（ふりかえり）が設定されており、ページが色分けされており活動がわかりやすいということがあげられる。他者は単元ごとの色分けをしているところが多い。光村は毎時間の活動については「ふりかえろう」でわかりやすいのだが、啓林館の方が単元全体の流れが見える。

また、啓林館の上巻はじめには「すたあとブック」がついており、就学前教育・保育からのつながりがわかり、学校での学習の導入になる。下巻の最後には「３年生へのステップブック」があり、生活科で学んできたことを振り返るとともに、３年生で新しく始まる学習へのつながりになっている。他者でも就学前教育・保育と小学校の架け橋期をつなぐためのページはあるが、啓林館が最も充実していると考える。

さらに、現行の啓林館の教科書に別冊としてついている「たんけんブック」は各校で使用しているものだが、別冊からデジタルに変わっている。これについては、別冊の方が持ち運びできて良かったという声もあるが、情報が増えているうえに、動画や音声を聞くことができるなど、より充実していると評価が高かった。

これらのことから、総合的には啓林館が最も推薦する発行者となった。

(教育長)

では、改めて選定委員会としての推薦する発行者はどこか。

(選定委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は啓林館である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、生活について採択する。採択する教科書は、啓林館でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、生活の教科書は啓林館とする。

続いて、音楽について報告を求める。

(選定副委員長代理)

音楽は、教出、教芸の２者について報告する。

教出は、「１年生の６ページに身体表現がしやすい楽曲が多く紹介されており、小学校音楽の導入に良い」、また、「色鮮やかできれいな写真が多く使われている」という推薦点がある。一方、「３年生７９ページにあるリコーダーの運指表に階名がなく、音楽が苦手な子どもにはわかりにくい」、「６年生６８ページなど合奏用の楽譜が細かく見にくい」という課題点がある。

次に教芸は、現在小学校で使っている教科書である。

「３年生の２４ページにあるリコーダーのタンギングの息の使い方が詳しく書かれておりわかりやすい」、「２次元コードが右上に固定されておりわかりやすい」などの推薦点がある。ただ、イラストがシンプルで児童が興味を持ちにくいという課題点があがっている。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、質問はないか。

(辻委員)

２者から採択するわけだが、感想としては、低学年の歌う、体を動かすに関しては教出、３年のリコーダーが始まるところからは教芸が使いやすいように感じた。

両者の特徴をもう少し教えてほしい。

(選定副委員長代理)

まず、教出ですが、３年生以上の巻末に「音楽を表すいろいろな言葉」があり、音楽に関わる言葉を知ることができ、鑑賞教材で記述する時のヒントともなる。また、音楽を形づくる様々な要素を「音楽のもと」としてページ右に示しており、児童に意識させやすくなっている。

教芸は、鑑賞教材では意識すべき楽器や音楽の流れがわかりやすく視覚的に捉えることができるよう「図形譜」を用いている。例えば４年生の３５ページにあるようなものである。曲によって様々な図形譜が用いられている。また、５年生３９ページに旋律づくりのページがあるが、和音の説明やワークシートがわかりやすく、児童も作りやすいと感じる。また、国歌が一番後ろのページにあるのも特徴であり、全学年で統一されており、見つけやすくなっている。

(辻委員)

地域の文化や芸能等、日本の文化の紹介が少ないように見受けられたが、どうか。

(選定副委員長代理)

確かにご指摘のとおり、海外の歌や鑑賞教材でもクラシックなどの曲が多い印象である。

ただ、必ず扱う教材として、これからも歌い継いでいく歌「共通教材」があり、両者とも掲載されているほか、祭りばやしや民謡、雅楽にも一部触れている。教出は５年生の表紙裏に「野村萬斎」さんを取り上げており、教芸は３年生と４年生の表紙裏に尺八演奏家の「藤山道山」さんを取り上げるなど、音楽の学習で日本の音楽や文化に触れる機会となっている。

(水島委員)

選定委員会としてはどちらを推薦するのか。またその理由を教えてほしい。

(選定副委員長代理)

選定委員会としては第一に教芸を推薦する。

その理由としては、まず子どもにとってなじみのある曲が多いことがあげられる。

また、追加教材で掲載されている楽曲も楽しく演奏してみたいと思う曲が多い。

つぎに、３年生のリコーダーの扱いである。児童が音楽に苦手意識を持つ原因の一つがリコーダーである。教芸はタンギングの説明が丁寧で、リコーダーに関する扱いも多い。また、教出は前回の教科書もそうであったが、運指表に階名が書かれていないのは苦手な子にはかなりしんどい。

(教育長)

では、改めて選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定副委員長代理)

選定委員会として、一番に推薦するのは教芸、続いて教出である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、音楽について採択する。採択する教科書は、教芸でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、音楽の教科書は教芸とする。

続いて、図画工作について報告を求める。

(選定委員長)

図画工作は、開隆堂、日文について報告する。

まず開隆堂は、現在小学校で使っている教科書である。

「学習のめあてがわかりやすく、特に力を入れたい部分が赤字で示されているのがよい」、「掲載作品に番号が書いてあり、授業の際に確認しやすい工夫がある」などの推薦点がある。ただ、「鑑賞や立体作品のページに写真が少ない」、また、「鑑賞教材は１冊に１つしかない」という指摘があった。

次に日文は、「立体作品の掲載数が多く、種類も豊富である」、「巻末の資料『材料と用具の引き出し』では図や写真、文字が大きく、内容が理解しやすい」、「３・４年生上５８，５９ページでは『トントン』『ドンドン』など擬音を用いてわかりやすく工夫されている」などの推薦点がある。一方で、「作品ごとに学習のめあてが設定されているが文字が小さくわかりにくい」、「１・２年生下１０ページのように写真が小さく、どんな作品なのかわかりにくいものがある」という課題点もあがっている。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

ただ今の報告について、何かご質問はないか。

(水島委員)

他の教科と比べて、授業の中で図画工作の教科書を使う頻度は高くないのではないかと感じるのだが、先生方はどのように教科書を使っているのか。

(選定委員長)

以前に比べ、近年はどの教員が取り組んでも学習の質が確保できるよう、教科書を活用した授業研究を各校及び小学校教育研究会で進めており、教科書の活用が増えている。ただ、教科書に掲載されている活動に取り組むときも、「教科書の内容を教える」のではなく「教科書を使って教える」という活用になる。そのため、掲載されている絵画作品や立体作品は、児童が取り組む際の参考となるため、できるだけバリエーションがあり、多く掲載されている方が望ましい。

(教育長)

では選定委員会において、一番の論点となった事項、最も選定の物差しとなった点はどんなことだったのか。

(選定委員長)

選定委員会におきましては、「めあての示し方」「一つの作品にかかる時間」「鑑賞教材の充実度合い」「用具等の使い方」など、多岐にわたるテーマで協議を行ったが、最終的には「掲載されている資料の豊富さ」を重視した結果となった。

(辻委員)

それぞれのテーマでどのような議論があったのか。

(選定委員長)

まず「めあての示し方」であるが、両者とも開いたページの左上あたりに３つずつ示されている。開隆堂はキャラクターを使っており、さらに特に大切なめあてには、赤字で下線を付している。一方、日文は、記載はあるものの赤字ではなく、また、低学年の教科書でも文字が小さい。

「めあての示し方」では、開隆堂の方が良いという評価である。

次に、「一つの作品にかかる時間」についてである。現在小学校における図画工作の時間数は、低学年で週に２時間程度だが、中学年から高学年になるにつれて減少していき、２週で３時間弱程度の時間配分となっている。その中で、一つの作品を制作する時間をどれだけとれるのかという話となった。現行の開隆堂は、短時間で仕上げられる作品が多い印象であり、例えば、１・２年生下の３４ページ、５０ページ、３・４年生下１８ページ、４６ページ、５・６年生下２６ページなど、絵画の教材だが、じっくり描くというよりも１、２時間ぐらいで仕上げるというものが多くなっており、時間をかけて作成する作品が少ないと調査員は課題点として挙げていた。これについて、選定委員会では、図画工作の時間数は少なく、じっくり時間をかけること自体が難しいという捉え方もでき、短時間で取り組める作品が多いと捉えることができるのではないかとの意見も出され、結論は出なかった。

次に「鑑賞教材の充実度合い」であるが、これは目次を見るとわかる。開隆堂はどの学年でも５ページ、日文は２ページである。開隆堂は１冊の教科書に１つしかない。逆に日文は、ほぼすべての教材に鑑賞のマークがついている。鑑賞のマークしかついていないものでも、３つ程度ある。また、日文には「アート・カード」というものがついている。５・６年生上の巻末だが、これはどの学年でも２次元コードから見られるようになっており、これを使った様々な活動が提案されている。この「アート・カード」は鑑賞にも使えるとの評価があった。

鑑賞教材では、日文の方が評価が高かった。

次に「用具等の使い方」については、両者とも巻末あたりに掲載されているが、日文は「材料と用具の引き出し」としてまとめて掲載されており、内容も充実している。例として、５・６年生上の電動糸のこぎりの使い方を見てほしい。開隆堂、日文ともに６２ページだが、電動糸のこぎりは、子どもたちにとって、あまりなじみがなく、初めて使うときにはドキドキする用具である。また、刃が曲がってしまったり、切れにくかったりとトラブルも良く起こる。日文の方がわかりやすく書かれていると感じる。また、２次元コードから飛べるデジタルコンテンツでは、開隆堂は使い方の動画一つだが、日文は、刃の取り付け方、切り方、形を切り抜く、角で回して切るなど、多くの動画があった。

「用具等の使い方」の説明については、日文の方が充実しているとの評価である。

最後に「掲載されている資料の豊富さ」については、５・６年生下の教科書で比較する。開隆堂は３２ページ、日文は２８ページである。

立体作品のところだが、開隆堂の掲載作品は少なく感じる。日文は粘土ではないが、多く載っている。２次元コードから飛べるデジタルコンテンツでも日文の方が多く作品が掲載されていた。調査員調査、学校調査ともに、開隆堂の掲載作品の少なさは課題点としてあがっていた。

(教育長)

では、選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定委員長)

選定委員会として、最も推薦する発行者は日文である。

(教育長)

日文ということだが、日文の良さをもう一度まとめて説明してほしい。

(選定委員長)

鑑賞教材が豊富であること、特に「アート・カード」が良いという評価である。

また、「用具等の使い方」の説明が丁寧で、デジタルコンテンツの動画も適切に用意されているのも良い点である。

さらに、立体作品などでは児童が参考にできる作品が多く掲載されているうえに、デジタルコンテンツでも豊富にあることも日文を推薦するポイントとなった。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、図画工作について採択する。採択する教科書は、日文でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、図画工作の教科書は日文とする。

続いて、家庭について報告を求める。

(選定副委員長代理)

家庭は、東書、開隆堂の２者について報告する。

まず東書は、現在小学校で使っている教科書である。

「題材ごとに、『家庭科の窓』が設置されており、見方や考え方の視点を意識しながら学習できるように配慮や工夫がされている」、「８ページに感染症対策や地震が起こったときなどの注意事項があるのが良い」という推薦点がある。一方、「様々なフォントが使われており、読みにくい」、「３０，３１ページの『手ぬいの手順』で

は黄色の布地に青の糸が見えにくく配色がよくない」などの課題点がある。

次に開隆堂は、「写真が鮮明で、文字の大きさが読みやすい」、「子どもたちが日常の家庭生活で実践できる」、「調理のレシピや裁縫の制作例が豊富である」という推薦点がある。ただ、「イラストが単調ではっきりしない」、「手洗いの重要性には触れているが、感染症という言葉はない」などの指摘がある。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

ただ今の報告について、ご質問はないか。

(教育長職務代理者)

両者の教科書を見た感想として、成人男性が家事をするイラストや写真が少なく感じたが、それに関して意見等はあったか。

(選定副委員長代理)

調査員調査では、両者とも男女共生の視点を大切にし、家族の構成や家事分担について配慮された内容となっているとの意見であった。また、調理や洗濯など、様々な活動で男女両方のキャラクターが活動をしている場面の写真やイラストを掲載するなど、配慮があるように感じた。ただ、成人男性が、となると意識はして掲載されていると考えられるものの両者とも５ページほどに載っている程度で決して多くはないと感じる。

(辻委員)

では、選定委員会としての推薦順はどうか。またその差はあるのか。

(選定副委員長代理)

選定委員会としては、開隆堂、東書の順に推薦する。その差はほとんどないが、子どもが使いやすいのは開隆堂と考える。

(柴﨑委員)

現在使っている教科書は東書だと思うが、使いにくいということか。開隆堂の方が子どもが使いやすいという点について、もう少し詳しく教えてほしい。

(選定副委員長代理)

確かに現在使用している東書の教科書に使いにくさはあるのか、ということは選定委員会でも疑問があったので、調査員に確認したが、東書が使いにくいわけではなく、両者ともに良さがあるとのことであった。ただ、子どもの使いやすさでは開隆堂の方ではないかとの意見であった。

まず、各題材で使われる見方・考え方の示し方だが、東書は「家庭科の窓」として示し、開隆堂は、クローバーの形で示している。見やすいのは開隆堂の方と感じる。例えば、東書の１１２ページ、開隆堂の１１８ページを見てほしい。調理実習

の単元だが、単元始めに見方・考え方が「窓」と「クローバー」で示されている。

ただ、開隆堂はそのあとも、１２２ページや１２４ページ左上にあるように、見方・考え方を働かせる場面ではキャラクターが登場する。家庭科の学習で大切な視点なので、重要な配置であると考える。

また、子どもが初めて取り組む活動やつまずきやすい活動での記載、説明についても差がある。

５年生家庭の最初の調理実習は「ゆでる料理」だが、東書の２２ページ、開隆堂の１４ページを見てください。「青菜のおひたし」と「ゆでいも」が掲載されているが、パッと見て工程がわかりやすいのは、開隆堂と感じる。両者とも、見開き１ページにわたっているが、開隆堂は色分けされ、流れを見やすくしているので、次の工程にスッと目が移るが、東書は、子どもたちは一瞬どこを見ればいいのか迷うように感じる。また、「ゆでいも」の工程の違いもある。東書はジャガイモをゆでる前に皮を包丁やピーラーでむくこととなっているが、開隆堂はゆでてから手でむいている。これは子どもたちからすると初めて包丁を使うのがジャガイモの皮をむくこととなり、授業をした教員からも、子どもの発達段階を考えるとゆでてから皮をむく方が良いとの指摘があった。

もう一つは「ミシンの使い方」である。東書の７２ページ、開隆堂の４０ページを見てほしい。

両者とも丁寧に触れているが、開隆堂にはミシン全体の糸の通し方が載っており、わかりやすい。東書は一つ前のページに全体図があるが、ページを行ったり来たりするのは少し面倒である。また、両者とも２次元コードからデジタルコンテンツに入ると、動画で確認できるが、東書の教科書は字が多く、詰まっている感じを受ける。

これらは一例だが、他にも、東書の教科書は「手縫い」のところの配色が見えにくいものとなっていたり、「洗濯の手洗いの手順」が見開き１ページを行ったり来たりする配置になっているなど、子どもが見たときに戸惑うような課題点がいくつか見受けられた。そのため開隆堂の方が子どもが使いやすいという考えにまとまった。

(教育長)

では、改めて選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定副委員長代理)

選定委員会として、一番に推薦するのは開隆堂、続いて東書である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、家庭について採択する。採択する教科書は、開隆堂でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、家庭の教科書は開隆堂とする。

続いて、保健について報告を求める。

(選定委員長)

保健は、東書、大日本、大修館、文教社、光文、学研の６者について報告する。

まず東書は、現在小学校で使っている教科書である。

「各単元に『深める・伝える』活動が設定されており、児童が目標を達成できたかわかりやすい」、「『他教科とのリンク』が掲載されており、他教科の学習と関連付けて考えることで理解が深まりやすい」という推薦点がある。一方で、「余白が少なく圧迫感を感じる」、「自分で考えて書く」という部分が多く、児童の思考を促すことができるが、書くことが苦手な児童には多く感じてしまうという課題点がある。

次に大日本は、「単元導入部に、簡単な運動やキャラクター探し、チャートを掲載し、児童がゲームを行いながら自然と学習に取り組める形となっている」、「３・４年生２５ページには自分の手と教科書の手の大きさを比較し、自分の成長を簡単に比較できる工夫がありよい」という推薦点がある。ただ、「書き込むスペースが小さく、罫線も無いので書きにくい」、「色合いが濃く、光の反射でチカチカするところがある」などの指摘がある。

次に大修館は、「各章のとびらに、著名人が採用されており児童の興味を引く、落ち着いた色合いで見やすい」、また、「課題は赤の背景に白い字になっており、注意を引く工夫がある」などの推薦点がある。一方で、大切な言葉は太字で表されているが、やや色が薄いという課題点があがっている。

次に文教社は、「各単元の終わりには『エピソード』や『もっと考えよう課』などのコラムが用意されているのが良い」、「考えを記入する枠には罫線があり、行を意識して書きやすく配慮されている」などの推薦点がある。一方、「行間や、資料と資料の間、文と写真の間が狭く読みにくい箇所がある」、「ステージやミッション、コンプリートなどの英語での表記があり、意図や内容が理解しにくい」などの意見がある。

次に光文は、「学習の流れが『知識の習得→考えて話し合う活動→振り返り』という思考の整理と同じ流れになっているので、児童も見通しが立てやすい」、「写真やイラストが多くわかりやすい」などの推薦点がある。ただ、「記述する欄が多く、書く活動が細かく設定されている」、また、「話し合う活動もやや少ないため、児童の考えが広がりにくく感じる」という意見もある。

最後に学研は、「１単元４ページで構成されており、見通しを持って指導、学習することができる」、「落ち着いた色合いであり、適度に余白があって文字が見やすい」という推薦点があった。ただ、「全体的にページ数が多いが、１ページあたりの情報量は多い」、「書く活動が多く、苦手な児童には負担となるのではないか」との指摘がある。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、質問はないか。

(教育長職務代理者)

「書く」ことについて、その分量やスペースなどが、推薦点や課題点としてあがっていたが、どの程度であれば適切なのか。

(選定委員長)

「書く」活動は、大切な学習活動の一つだが、教科によってそのウェイトは違う。

国語や外国語では「書けるようになること」自体が、必要なスキルであり、目標となっている。一方で、調べることや考えること、話し合うことがより重要視される教科もあり、「歌う」や「作る」「えがく」などの表現方法が目標となっている教科もある。

ただ、どの教科においても「書く活動」は設定されており、その教科の目標や学習内容によって、適切な分量は変わってくる。また、当然だが、年齢や個人の得意不得意でも変わる。

今回の保健については、学習指導要領の内容を大まかにいうと、３・４年生では、「健康な生活」及び「体の発育・発達」について理解するとともに、課題を見付け、その解決に向けて考え、それを表現することがその内容となっている。５・６年生では、「心の健康」「けがの防止」「病気の予防」について理解するとともに、課題を見つけ、その解決に向けて考え判断し、それを表現することがその内容である。

つまり、最後の「表現する」という部分では「書く」ことで表現することが多くなると考えられる。

各者の教科書を見てみると、書くスペースの大きさや罫線の有無など差はあるが、単元の最後は「生活にいかす」ことについて、「書く」活動が設定されている。

一方で、学習活動の中の、課題をつかむ、考える、話し合うという部分においては、「書く活動」の配置や分量には、各者ばらつきがある。課題をつかむために「書く」、自分の考えを「書く」、話し合いに向けた考えをまとめるために「書く」など、様々に設定されているが、あまりに書くところが多いと、書くことに時間がかかったり、注力してしまったりすることとなり、考える活動が減る、おろそかになるな

ど、目的とずれてしまう恐れがあるということである。また、書くことが苦手な児童は一定数各学級にいるが、その子たちが意欲的でなくなってしまう懸念もある。

その観点で見たときに、書く分量が多く、それを課題点として挙げているのが、光文と学研である。

(水島委員)

３・４年生の「体の発育・発達」のところを見ていたのだが、身長の伸びなどについては、各者写真やイラストで説明されており、差はないと感じた。また、思春期のからだのつくりについては、特に大修館、光文のものは女性器、男性器の詳細な説明について、シンプルではあるがきちんと説明されており、わかりやすく感じた。

この点については、意見はあったか。

(選定委員長)

その単元については、調査員調査や選定委員会でもポイントとなった。

調査員自身が授業をする際に感じたこととして、思春期のからだの変化の説明に裸のようなストレートな表現のイラストが使われていると、児童が恥ずかしいと感じ、「見たくない、見ない」となってしまう場合があったため、やや配慮された表現のイラストが望ましいという意見があった。

その観点で見ると、大修館、光文の２者は、ストレートな表現ではなく、配慮されていると感じる。また、この２者は、体の変化についても、学習内容がしっかりと理解できるよう説明も丁寧で、わかりやすい図となっている。

(教育長)

では、選定委員会としての推薦順はどうか。

(選定委員長)

選定委員会としては、最も推薦するのは大修館、次に光文、その次に東書である。

(教育長職務代理者)

どうしてその順番になったのか。その理由を簡単に教えてほしい。

(選定委員長)

先ほど質問のあった、書く分量や思春期のからだについての取扱いを踏まえたうえで、他の点も話し合った。

まず、単元の学習の振り返りについてだが、大修館と光文は他者に比べて充実している。また、大修館は、「進んで取り組むことができたか」という設問があり、学習意欲を自己評価できるようになっているのが良い。東書は２次元コードからワークシートに飛ぶようになっているが、これは賛否両論あった。

次に、単元のとびらに注目すると、東書は単元内容にかかわる写真で導入してい

る。光文はマンガを用いた導入である。一方、大修館は将棋の藤井聡太さんやフィギュアスケートの羽生結弦さんなど著名人の写真とコメントを用いており、児童の興味を引くと感じる。

これらの理由から、最も推薦するのは大修館と考えた。

(教育長)

では、改めて選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定委員長)

選定委員会として、一番に推薦するのは大修館である。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、保健について採択する。採択する教科書は、大修館でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、保健の教科書は大修館とする。

続いて、外国語について報告を求める。

(選定副委員長代理)

外国語は、東書、開隆堂、三省堂、教出、光村、啓林館の６社について報告する。

まず東書（ニューホライズン　エレメンタリー）だが、「『書く』内容が充実しており、教科書に書きこめるようになっており、ワークシートを別で用意する必要がない」、「５，６年生の２年間で自分のことから地域や世界へと広がり、最後には自分を見つめて中学校へ進学するという組み立てになっており良い」という推薦点がある。一方で、よく使う語句や例文が掲載された「My Picture　Dictionary」が別冊であるが、２年間で１冊であり、なくしてしまうなどの懸念があるという意見もある。

次に開隆堂（ジュニア　サンシャイン）は、「各単元に『Song Box』や『Chant Box』があり、英語の音声やリズムに慣れ親しむ工夫がされている」、「教科書が大きく、ページに余裕があって見やすい」などの推薦点がある。ただ、「書く活動については物足りない」、「各学年に『Word Book』が別冊であるが巻末が良かった」という意見もある。

次に三省堂（クラウン　ジュニア）は、「『世界のまつり』『世界のスポーツ』などの内容があり、他教科と関連性を持った学習展開を行うことができる」、「ストーリータイムや世界のおはなしなど、リスニングの発展的な内容が含まれている」という推薦点がある。一方でイラストが多く、写真が少ない印象である、「My Dictionary」

が別冊であるが、２年間で１冊であり、なくしてしまうなどの懸念があるという意見もある。

次に教出（ワンワールド　スマイルズ）は、「アルファベットを取り扱うページが多く基礎基本の習熟、復習に役立つ」、「『はしのうえのおおかみ』や「『手紙』など他教科の教材を取り上げているので、興味関心をもって取り組みやすい」との推薦点がある。ただ、「書く活動が少ない」、「巻末のワークシートは使いづらく感じる」という指摘もある。

次に光村（Here We Go!）は、現在小学校で使っている教科書である。

「基本表現の反復練習が多く、基礎の定着に適している」、「『Let’s Read』という形で、アクティビティの後にもう一度声を出す練習などが行われるため表現方法の定着を図ることができる」などの推薦点がある。一方で、「写真が多く、ぎゅっと詰まっている印象で、見づらく感じる児童もいるかもしれない」、「書く力の定着や発展学習は少し物足りない」との意見もある。

最後に啓林館（Blue Sky Elementary）は、「各単元のゴールがはじめに書かれていて、見通しをもって学習に取り組むことができる」、「コラムもありＳＤＧｓに関するものや海外の生活など、興味をひくものが多い」という推薦点がある。ただ、「余白が残っていて文字が小さく、色が薄く感じる」、「『Word List』では、人種などの多様性が感じられない」などの課題点がある。

続いて、外国語に関してはデジタル教科書についても、調査研究の対象とし、採択に向けた検討材料の一つとしている。デジタル教科書の見本については、先日ご覧いただいたとおりである。

各者、デジタル教科書の一部を見本として見ることができたが、学年や取り上げている部分がちがうので、同一の内容で比較することはできなかった。

デジタル教科書で可能であった機能について、簡単に報告する。

まず、デジタル教科書に書きこむことは各者可能である。

次に、日本語へのルビの追加だが、東書、開隆堂、教出、光村、啓林館が見本では可能であった。

次に、色を反転させる機能は、６者全部で可能であった。これは視覚障害への配慮と思われる。

次に、音声のスピード切り替えでは、開隆堂、三省堂、教出、光村、啓林館の５者で可能であった。ただ、０．１倍速や４倍速などはあまり必要ないというのが実感である。

次に、録音再生機能は教出が可能であった。

またほかにも、字幕機能や付箋がはれたり、文字の書体を変えられたりと、各者、

多様な機能がある。

総合的にみると、授業をするのに必要な基本的な機能は各者、概ね備えていると言える。教出が比較的機能が多いと感じるが、各者できることとできないことが混在しており、この見本だけでは、どこのデジタル教科書がすぐれているとは判断が難しいところである。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、質問はないか。

(水島委員)

外国語でも「書く」活動について触れられていたが、どのような協議があったのか。

(選定副委員長代理)

小学校の外国語の学習は、３年生から始まる。３・４年生は「外国語活動」、５・６年生は「外国語科」として学習をしている。

学習指導要領において、「外国語科」の目標は「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成すること」である。

３・４年生の「外国語活動」では、「話すこと」「聞くこと」を中心に外国語に慣れ親しみ、外国語への関心を高めることが大きなねらいである。それを受けて、５年生からの「外国語科」では、「読むこと」「書くこと」が加わり、さらに中学校への接続を図ることも重視される。

そのうち、小学校段階での「書くこと」については、大まかにいうと、「アルファベットがかける」、「音声で十分に慣れ親しんだ単語や表現を書き写せる」、「その単語や表現を使って自分のことや身近なことを書くことができる」ことが目標である。

選定委員会においても、「書くこと」をどの程度重視するのかということがテーマとなった。

調査員が中学校の英語の先生と話をした際に、「中学校に入る段階で差ができている」という話があったそうである。そこで、調査員は児童の力の差と中学校との段差の解消に向けて、「書くこと」を大切にしないといけないと考えたと話があった。

誤解のないように補足すると、「書くこと」が最も大切と考えたのではなく、今よりも「書くこと」を重視した外国語の学習が必要と考えたということである。

阪南市ではＡＬＴを各校に派遣し、わくわくしながら英語を学ぶことをめざしている。その中で「話すこと」「聞くこと」の活動は継続して行われており、取組が進

んできている中で、「書くこと」にさらに目を向けるということである。

その観点で見たときに、東書の教科書は、「書く」内容が充実していて、教科書に書きこむことができるという利点がある。

(水島委員)

「書くこと」以外に、どのような協議があったのか。

(選定副委員長代理)

「『聞くこと』『話すこと』がベースにあるのだから、そこに強い教科書ではどうか」という意見や、「『書くこと』が増えると苦手意識を持つことにつながらないか」、「基礎基本の定着も大切である」、「会話することが英語の楽しさにつながる」、「バランスが大事である」などの多くの意見が出た。

(教育長)

それらの協議の結果、どのような推薦順となったのか。

(選定副委員長代理)

選定委員会としては、最も推薦するのは東書、次に三省堂と光村が並んでいる。

ちなみに学校調査では、東書と現行の光村が最も評価が高くなっている。

(柴﨑委員)

どうしてその推薦順となったのか。理由を教えてほしい。

(選定副委員長代理)

まず、やはり「書くこと」をどう取り入れるかということだが、現行の光村の教科書の場合であっても、書く活動を追加する場合にワークシートを用意しているとの話があり、それであれば、東書のように教科書に書きこめる方が、学習のあとが残り、あとで見返すなどもできるというメリットがあるとなった。

続いて、三省堂だが、書く活動が比較的多くアルファベットについて丁寧に扱っており、全ての基礎となるアルファベットの定着に繋げられる点に加え、日本語表記が多いのも三省堂の特徴で、苦手意識がある子には、助かるのではないかとの意見があった。

光村は、現行の教科書であり、小学校の教員からは特に不具合があるとは聞いていない。また、書くことに関してはやや物足りないが、基本表現の反復練習が多く、基礎の定着に適しているとのことから、強みがあると考えた。

総合的に判断した結果、最も推薦するのは東書、次に三省堂と光村となった。

(教育長)

では、確認だが、選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定副委員長代理)

選定委員会として、東書を一番に推薦する。続いて三省堂と光村、の順と考えて

いる。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、外国語について採択する。採択する教科書は、東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、外国語の教科書は東書とする。

続いて、道徳について報告を求める。

(選定委員長)

道徳は、東書、教出、光村、日文、光文、学研の６者について報告する。

まず東書は、現在小学校で使っている教科書である。

「発問を二つに絞っており、柔軟な授業展開が可能である」、また、「色も目立たないものとなっている」、「現行の教科書から教材が同じでも挿絵等は新しくなっており、中にはインパクトがあり、考えるきっかけとなるものがある」などの推薦点がある。一方、「ルビを打っている漢字もあるが、出てきた初めだけにしかルビを打っていない」、「６年１１０ページからの『ぼくの名前呼んで』は、今と時代背景が違うという注釈がある方がよかった」という指摘がある。

次に教出は、「スマホやいじめなどの現代的な課題の資料の前後に、統計的なグラフが載せてあるなど、さらに深く考えられるようになっている」、「どの資料にもデジタルコンテンツがある」などの推薦点がある。ただ、「教材ごとにタイトルのフォントが違っていたり、タイトルの文字が小さかったりして見にくい」、「各学年に本教材が３０本、補助教材が４～５本となっており少ない」、また、「地域特有のものや偉人のものが多く使いづらさがある」などの課題点がある。

次に光村は、「障害理解教材に力を入れている」、「４年の１３６ページで視覚障害、５年の１４０ページでハンセン病、６年１７９ページで聴覚障害を取り上げている」、「『ともだちや』『はなさきやま』『そらまめくんのベッド』の著者など、児童がよく知っている物語や著名人を扱った教材が多く、興味をもたせることができる」などの推薦点がある。ただ、「巻頭に『道徳みちあんない』があるが、順番にしないといけないような印象をもってしまう」、「紙質が黄色かかっている」などの意見がある。

次に日文は、「古くからある教材とコロナなどを扱った新しい教材がどちらもあるのが良い」、「どの教材にもデジタルコンテンツがある」との推薦点がある。一方で、「教材の後ろの発問が黄色の目立つ吹き出しになっており、教材よりもそちらに目がいってしまうのではないか」、「教材によって文字の大きさが違って読みにくい」

との指摘もある。

次に光文は、「コロナのことを取り扱った教材など、新しい教材が入っていてよい」、「思考ツールが多く紹介されている」、「タブレットの活用とリンクしている」などの推薦点がある。ただ、「資料の後ろに４つの発問が掲載されており、授業しづらいのではないか」、「デジタルコンテンツが一部資料だけにしかない」との課題点がある。

最後に学研は、「ルビがたくさんついている」、「教材の後ろにある『考えよう』のコーナーが、そこまで主張していないのが良い」との推薦点がある。ただ、「昔からある読み物教材が多く児童が関心を持ったり、共感したりしづらい」、「デジタルコンテンツの掲載が少ない」などの課題点もある。

各者の調査、研究報告については、以上である。

(教育長)

それでは、ただ今の報告について、質問はないか。

(辻委員)

６者ありますが、上位と考える発行者を教えてほしい。またその差や理由を説明願う。

(選定委員長)

選定委員会としては、東書、光村、光文の３者が上位と考えている。他の３者とは開きがある。

最も大きな理由としては、掲載されている教材である。東書は現行と大きく変わっていないが、挿絵が魅力的に変わっていたり、「つながる・ひろがる」でさらに深く考えられる工夫があったりと充実している。光村は先ほど推薦点で挙げたように、障害理解の教材や児童がよく知っている物語や著名人のお話などの教材が多く、魅力的である。光文はコロナ禍の教材など新しい教材が多く、国際理解教材も時代に合っている。他の３者は、古くからの教材が中心で、一部新しいものがあるものの、児童が共感しづらく、興味を持ちにくいように感じた。

(柴﨑委員)

先ほどの推薦点や課題点で後ろの発問という言葉があったが、そこは考慮されているのか。

(選定委員長)

道徳の授業では、子どもが自分の考えを持ち、みんなで多様な視点で話し合う中で、自己のより良い生き方を考えていくことをめざしている。それにせまるために授業者は発問を用意するが、その発問や考えを誘導するような記載があると、教員が授業を自由に組み立てられないこともある。

阪南市では、道徳が教科化となった時に、発問などが最も示されており、授業者の自由度が狭い教科書を採択した。教科となることで、どの教員が授業をしても一定の質を確保できるためであった。

しかし、教員からは、あまり評判は良くなく、その教科書発行者も次回の改訂からはかなり、自由度が広がったものとなっていた。阪南市の小学校では、道徳教育の研究が盛んで、大阪府の研究校の指定を受けている学校もある。その中では、教材の最後に載っている発問はできるだけ少なく、シンプルで目立たないものである方が良く、阪南市の道徳の授業づくりにマッチしている。

上位３者を見比べると、東書が最も少なく、控えめな表現となっている。光文は４つ記載があり、割と目立つ色になっている。光村も少なめだが、やや主張している感じがする。

学校の教員である調査員も東書のこの点を高く評価している。

(柴﨑委員)

そのほかに上位３者の推薦点、課題点はないのか。

(選定委員長)

東書は、デジタルコンテンツが全教材にあり、朗読、スライドショーが利用でき、さらにワークシートがある。また、巻末に「考えるためのツール」が紹介されており、思考の共有化、見える化により、議論を深められる。また課題点としては、学校調査で行間が狭く見にくいところがあるとの意見があった。

光村は、全教材にデジタルコンテンツがあり、音声や資料を見ることができる。

また、巻末の「まなびの道具箱」で思考ツールが紹介されているのも良い。

ただ、字が細く見にくい、教材が国語のようなものがある、などの意見もあった。

光文は、本教材３５本に加えて付録があり、教材数が豊富である。また、光文にも思考ツールを紹介するページがあり、良い。ただ、字が小さい資料があるという指摘があり、デジタルコンテンツは全教材ではないのが残念である。

(教育長)

では、選定委員会として推薦する発行者はどこか。

(選定委員長)

選定委員会としては、時間をかけて協議し、かなり意見が拮抗したが、東書を一番に推薦する。続いて光文、その次に光村と考えている。

(橋本教育長)

東書が一番となった理由を改めて教えてほしい。

(選定委員長)

３者それぞれに良さがあり、色々な意見が出たが、最終的に決め手となったのは、

先ほども挙げた、教材の最後に示されている発問の取扱いについてであった。東書が最も控えめな表現となっており、教員にとっても児童にとっても、誘導的な印象を受けなかったことが大きい。

また、それに加え、教材やデジタルコンテンツの充実など、総合的に考えて、東書が一番となった。光文、光村も教材は良いが、発問がやや誘導的である点や、デジタルコンテンツの配置、字が細かく見にくい、紙が黄色がかっているなどの点が課題点と考え、このような推薦順となった。

(教育長)

確認だが、選定委員会として最も推薦する発行者はどこか。

(選定委員長)

選定委員会としては、東書を一番に推薦する。

(教育長)

今の報告について、意見・質問はあるか。

それでは、道徳について採択する。採択する教科書は、東書でよいか。

(全委員)

異議なし。

(教育長)

異議なしと認め、道徳の教科書は東書とする。

○採択の確認

(教育長)

さて、ここまでひととおり、選定委員会からの各教科の報告を受け、それぞれの種目において採択をしてきた。ここで最終、もう一度、採択した教科書について、確認を行う。

阪南市教育委員会として、令和６年度に使用する小学校教科用図書は、国語　光村図書、書写　教育出版、社会　教育出版、地図　帝国書院、算数　日本文教出版、理科　新興出版社啓林館、生活　新興出版社啓林館、音楽　教育芸術社、図画工作　日本文教出版、家庭　開隆堂、保健　大修館書店、外国語　東京書籍、道徳　東京書籍

以上、１３種目について、ただいま確認した通り、採択を決定したいと思うが、どうか。

お諮りする。異議はないか。

(全委員)

異議なし。

（教育長）

異議なしと認める。令和６年度使用小学校教科用図書は、ただいま確認した通りに決定する。

○中学校教科書の採択

（教育長）

では、次に令和６年度に中学校で使用する教科書について採択する。

お手元の別紙１をご覧いただきたい。中学校の令和６年度使用教科用図書については、「令和４年度に採択したものと同一の教科書を採択しなければならないこと」となっていることから、別紙１の通り、令和４年度採択のものと同じものを採択したいと思うが、よろしいか。

（全委員）

異議なし。

（教育長）

異議なしと認める。

中学校の令和６年度使用教科用図書については、別紙１の通り、令和４年度採択のものと同じのものを採択することとする。

**◆議決事項第２号「その他について」（学校教育課）**

（教育長）

それでは、議案の２に移る。

「その他」で、何か議決を必要とするものはないか。

（全委員）

なし。

（教育長）

ないようなので、これをもって、第３回臨時教育委員会を閉会する。

以上